

富士山は日本一の山

標高3,776メートル。昔は「不尽」「不二」「富慈」などとも書かれ、アイヌ語の「フチ」(火)に由来するといわれる“富士山”は、まさに日本の代表的な山ですが、最近になって、その“富士山”が活火山であることが再認識されています。

雄大でかつ美しくそびえたつ富士山が噴火するなど、想像もつきませんが、この“富士山”の噴火は歴史に残っているだけでも十数回を数えるのです。いくつかの噴火の中で記録に残る古いものでは、西暦800(延暦19)年の噴火があります。これは山頂火口からの大噴火で、大量の火山灰が東海道の足柄路を埋めたため、それから2年後に箱根路が開かれたといわれています。西暦864年には北西側標高1,424メートルの長尾山から流出した大量の溶岩が、広大な地域を覆い、その影響でふもとの湖が分断され、西湖と精進湖を形成しました。一方、歴史の上で最も新しい噴火は今よりおよそ300年余り前で、富士山の火山活動の中でも最大級といわれる西暦1707年の宝永噴火といわれています。この時期に東南海地方にマグニチュード8.4という巨大地震が起こり、激震と津波によって東海から四国

にかけて、甚大な被害を受けました。これらの災害との関連ははっきりしませんが、同じ頃に激しい火山性地震を伴いながら、宝永の噴火は始まったのです。1707年12月16日午前10時、南東側の山腹をつき破って大爆発が始まると、折からの西よりの風により、軽石や砂が火口の東側一帯に降り注ぎ、たちまち麓の村々を埋め尽くしました。最初は白い灰が、つづいて軽石が降り、やがて熱い石が降って落ちると碎けて燃え上がったといわれています。火口東側の須走村は、3メートルもの火山灰に埋まり、また、今の御殿場市から小山町にかけての村々も、大きな被害を受けました。火山灰は遠く離れた江戸(当時)の町にまで到達したといわれています。

現在、消防庁を含め関係機関では、このような災害に対しさまざまなケースを想定して、対応策を検討しています。

ことわざに“一富士二鷹三茄子”とあります。これは夢に見ると縁起のいいものを順に並べたものです。“富士山”がいつまでも美しく、私たちの夢を天高く掲げてくれるものであってほしいものです。

(参考文献：日本大百科/小学館)

